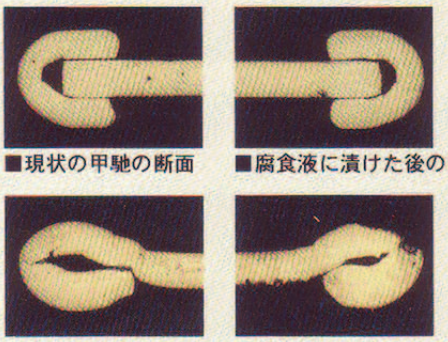
～本物志向の甲馳(こはぜ)を目指して～

こはぜって？

「こはぜ」は足袋・脚絆・手甲などの合わせ目をとめるのに使われる爪形のものです。合わせ目の端につけ「こはぜかけ」にかけて合わせてとめます。現在「甲馳」と書きますが、これは当て字に近く**「二つ以上の物を硬物質でつなぎ合わせてひとつにする」**の意に近いようです。

甲馳の面にイラストを入れることも出来ます

腐食テスト



■現状の甲馳の断面　■腐食液に漬けた後の断面

■他の甲馳の断面　■腐食液に漬けた後の断面

こはぜの歴史

足袋は平安中期、鼻緒のずれを防ぐ為に生まれましたが、一般的ではなく、領主の許可が必要でした。

その足袋に甲馳をかける仕立てになったのは明治中期頃です。

第一次大戦後の好景気時には、18金製の甲馳が登場したこともありますが、第二次大戦が始まると真鍮の代用として鉄板に亜鉛メッキをした甲馳が製造されましたが、サビが酷く足袋を汚してしまうので、アルミ板の配給を受けました。

プラスチック製もありましたが、実用とせず、一足6枚ある甲馳を4枚に節約しました。

戦後、真鍮にニッケル鍍金した美しい甲馳が多く使用されるようになり、現在に至っています。

カラー甲馳

こはぜの現状

着物を着て足袋をはくのが当たり前であった時代には、甲馳は、ただ足袋が脱げなければ十分でしたが、着物を着る習慣が日本人から離れてしまった現在、足袋の必要性も極めて少なくなりました。

そうなると甲馳の役目は、ただ足袋が足から脱げないだけではなく、いかに素足にフィットし、甲馳が金属である事を忘れる程の柔軟性に富んだものであるかが問われてくるのです。すなわち**本物志向の甲馳**が望まれている訳です。我々はその問題を解決するために甲馳に溝のある真鍮線を巻いています。下図のように甲馳に枠組みをすることによって弾力性バネ性に優れ、たわみ力も増し足に異物感を与えず体の曲線にフィットするようにできています。着物を美しく着こなすのは足もとの美しさで決まると言っても過言ではありません。足もとからの着こなしを大切にしてみようではありませんか。

創業85年の実績・経験を誇る製造品

AOYAMA Industrial Lab.
株式会社
青山産業研究所
〒658-0064
神戸市東灘区鴨子ケ原1-3-8-402
[TEL]　078-855-5580
[FAX]　050-3033-0452
[MAIL]　info@aoyama-kohaze.com